カリキュラム・マネジメントを活用した効率的な授業づくり

－ Ｌシート「年間単元配列表」を用いたチームアプローチ －

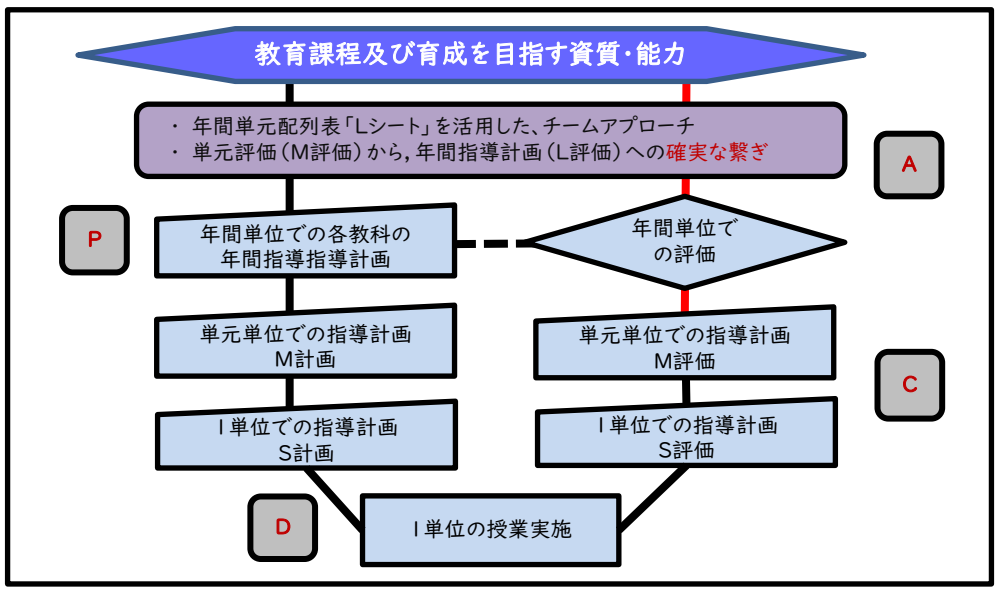
上園　宗徳（熊本大学教育学部附属特別支援学校）
高等部職員（熊本大学教育学部附属特別支援学校）
八幡　彩子（熊本大学大学院教育学研究科）

１　目的

Ｌ・Ｍ・Ｓシートを用いて，年間・単元・題材レベルの各段階での授業計画を作成し，各評価・改善を，年間指導計画及び教育課程の改善につなげ，計画的かつ効率的な授業づくりのプロセスを確立する。

２　現状及び課題

Ｍ・Ｓシートを活用し，チームアプローチによる単元・題材レベルの授業計画の作成及び授業評価・改善は行えているが，年間指導計画レベル（Ｌ）での評価及び振り返りのプロセスが明確になっておらず，Ｍ・Ｓの評価を活用しきれていない。



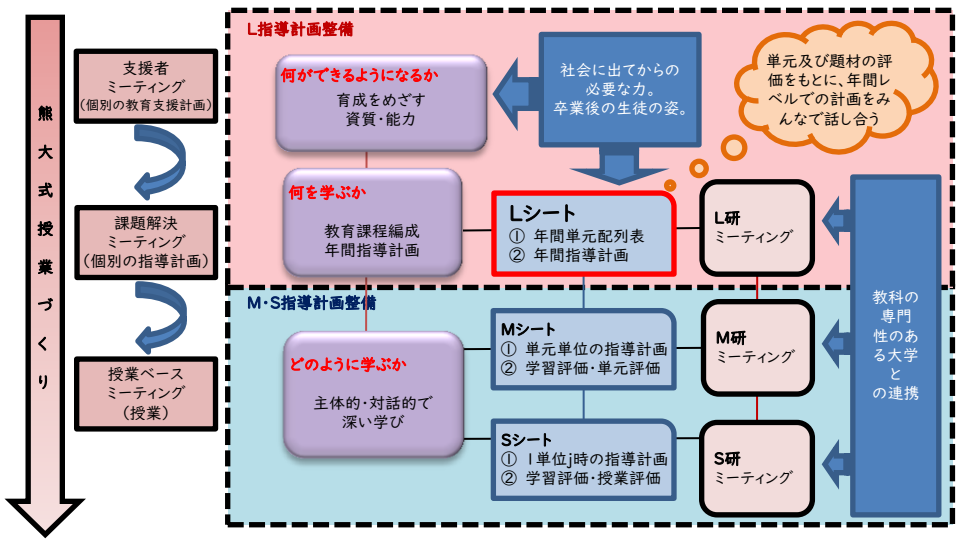
３　仮説

年間単元配列表（Ｌシート）を作成し，年間レベルの視点により，定期的なスパンで評価を行うことで，各教科等との関連・指導時期・指導内容，配列，年間指導計画を見直し，より効率的に授業の質を向上させることができるのではないか。また，「高等部の育成を目指す資質・能力」を，各教科等の指導で高めることができているのかを検証することができるのではないか。

４　方法

Ｌシートのツールを活用し，高等部のチームで効率的に教育課程の改善を図ることができるのかを検証する。

（１）年間単元配列表「Ｌシート」を作成し，教科の関連・指導時期・指導内容，配列等の視点を基に年間指導計画を学部全職員で検討する。
（２）８月・１２月・２月の３回，各教科等の指導におけるＭ・Ｓシートの評価を持ち寄り，Ｌシートを用いて、学部全職員で年間レベルでの評価・改善を行う。
（３）Ｌシートの評価の際に，各教科等の指導で身に付いた「高等部の育成を目指す資質・能力」について確認をする。

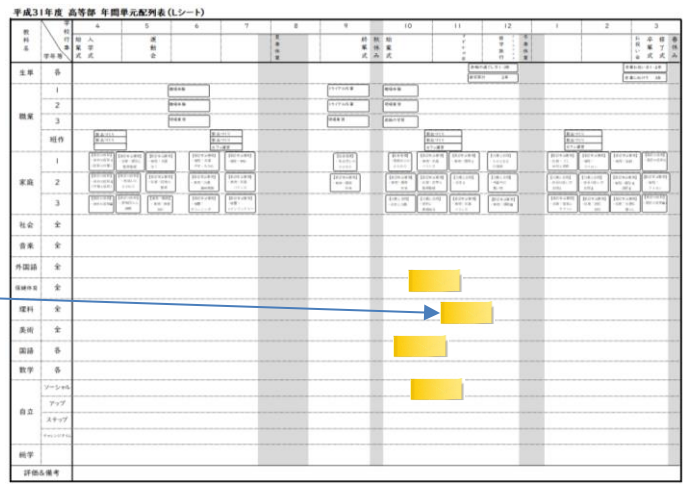


<Lシートの構成>

- ○ 高等部教育の中核となる教科「家庭，職業」を軸として配列
- ○ Ｉ枚のシートにすべての指導内容を配列
- ○ 横方向に時系列の視点，縦方向に横断的視点
- ○ 付箋による可動式
- ○ 付箋に題材名および，単元名のみを記入
- ○ 下･右横に気付き欄

<活用方法>

- ○ 学部の教師全員で、各教科及び年間単元を考える機会



５　実践

＜Ｓｔｅｐ１＞

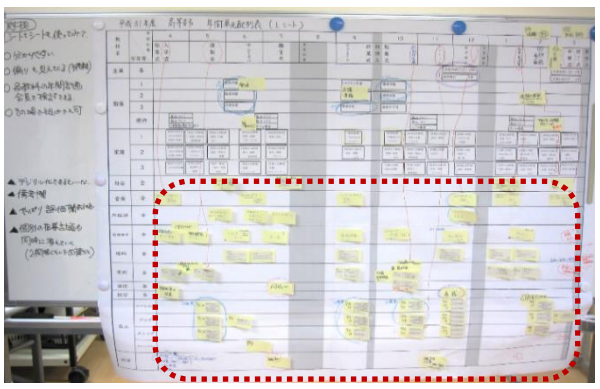
各教科等の指導の年間指導計画案を持ち寄り，各教科等の関連・指導時期・指導内容，配列等の視点をもとに年間単元配列表「Lシート」を検討する。

Ｌ研「年間単元配列表作成」

期日：平成３１年３月末

材料：①Lシート
②教育課程年間評価シート
③各教科の年間指導計画案（来年度）

方法：①各教科等の単元の題材名および学習内容を簡潔に付箋に書く
②Ｉ教科ずつ，付箋を貼りながら学習のねらいを説明する
③横軸の時系列の視点で見る
④縦軸の教科横断的な視点で見る
⑤全体を俯瞰的に見る



＜Ｓｔｅｐ２＞

各教科等の指導のＭ・Ｓの評価を持ち寄り，年間単元配列表「Lシート」を用いて，年間レベルの視点での評価及び改善をする。

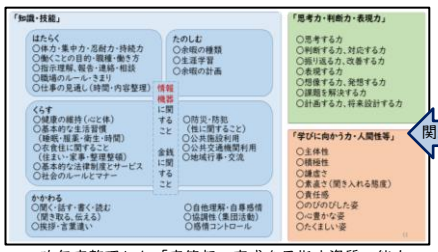
Ｌ研「本年度の４月～７月の振り返り」

期日：令和元年７月末

材料：①Lシート
②各教科の年間指導計画の冊子
③各教科のM・Sシート（評価）
→各教科担当者
④高等部の目指す資質・能力

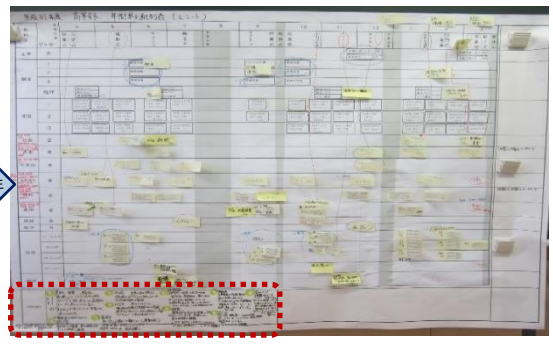
方法：①Ｉ教科ずつ，M・Sの評価を基に、Ｌ（年間の視点）で評価する
☆ 時期的な視点
☆ 他教科や行事との横断的視点
☆ 教科の特性
☆ ９月以降の変更点
②各教科で高めた「高等部の育成を目指すの資質・能力」を確認する
③年間の指導計画及び単元配列（教育課程）を俯瞰的に見る

<チームアプローチによるL研>



昨年度整理した「高等部の育成を目指す資質・能力」

関連性



＜Ｓｔｅｐ３＞

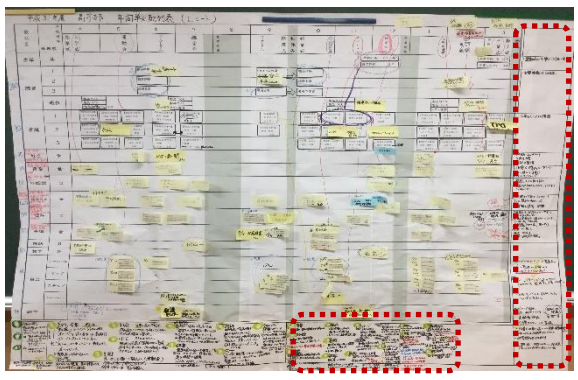
各教科等の指導のＭ・Ｓの評価を持ち寄り，年間レベルの視点で評価を行い，本年度の課題と成果を洗い出し，来年度の年間指導計画を検討する。

Ｌ研「本年度の９月～１２月の振り返り」

期日：令和元年１２月末

材料：①Lシート
②各教科のM・Sシート（評価）
③個別の指導計画評価
④高等部の育成を目指す資質・能力
⑤各教科等関連表

方法：①Ｉ教科ずつ，M・Sの評価をもとに，Ｌ（年間の視点）で振り返る
②来年度の教育課程を視野に入れ、本年度の課題と成果を確認する
③来年度の年間計画を検討する。



６　成果

○年間単元配列表を用いて，学部全職員が年間レベルの視点で評価を行うことで，各教科等との関連・指導時期・指導内容，配列，年間指導計画を見直し，より効率的に授業の質を向上させることができた。
○Ｍ・Ｓ評価を，Ｌ評価へ繋ぐプロセスに取り組んでいく中で，Ｉ単位時間の学習を大切にしたチームアプローチをおこなうことができた。
○年間単元配列表「Ｌシート」を基に，学部全職員が成果や課題を共有できたことで，より効率的な教育課程改善につなげることができた。

７　考察

○L･M･Sの「評価」に重点を置き，カリキュラム･マネジメントのプロセスを考えてきたが，育成を目指す資質･能力を明らかにし，どの教科を核として学習を組み立てるのかを検討する過程が重要な位置付けとなる。
○各段階での評価を効率的につないでいくためには，学部職員全員が一堂に会する時間と共有ツールが不可欠になる。
○得た知識や技能が断片的になりやすく，生活の場で応用されにくい知的障がい教育の教科指導については，一つ一つの教科･授業を年間レベルでの視点でより細やかにつなげていくことが今後も必要になっていく。